

神歌

第七回にて解説済み。一種の祈りであるから、特にシテは、細かい節抜いに拘らず、邪念を捨て去って、のびのびと謡って欲しい。

絵馬

絵馬の行事(前場)と天の岩戸神話を取り入れながら、五穀豊穰、天下泰平を祈願す趣は、神歌を受けての謡に相応しい。

但し、初番物でありながら、神舞ならぬ中の舞であり、後シテは女性(天照大神)と言う点で極めてユニークである。また、初番物にしては柔吟のウエイトが高い。

謡い順は一級ではあるが、技巧的などころはほとんどなく、謡いやすい曲といえる。

シテ前前の尉、後の女神ともに、けれんみのない、明るい謡であるべき。

地謡全体に重くならず、よどみなく謡って下さい。

クセの途中、六丁裏三行の振り浮きは、拍子不合のときと異なり、一つ振りながら浮いたらそのまま次のハル(上音)に持ち上げていくこと。

箴

屋島、田村と並ぶ勝修羅の曲のひとつ。凛々しい若武者と梅の花の取り合わせも爽やかであるが、謡いもその情感に沿って謡いたいもの。基本は修羅物だから剛吟が基本であるが、絵馬同様、柔吟が随所にあつて、曲の情感の盛り上げに効果を上げている。

シテ二丁表のサシ謡から、剛吟と柔吟が交互になるので、謡い手の力量がすぐに分かかってしまうから要注意。柔吟の部分は、やや引き立てて、のびのびと謡い、剛吟になったら、少し抑え目に、力を込めて謡うのがポイント。

なお、二丁表四行目の柔吟に移るときは、中音であることに注意されたい。従つて、入節は大きく振りながら上に突っ込むこと。続く下歌、上歌は拍子合なのでリズムを忘れずに、ややゆったり

後シテは強く、確りと謡う。ワキのテンポとは明確に差をつけること。ワキ修羅物のワキは重くならず、さらさら謡うのが基本、本曲も同じ。

地謡クセと最後の修羅乗りが聞かせどころ。クセの二段落としては生み字が決め手、修羅乗りはテンポが決め手。素人の修羅乗りは謡が早過ぎて軽くなってしまう傾向がある。所謂こけた謡い、にならぬよう心がけたいもの。

雲林院

上品で、聞かせどころが沢山ある、どちらかと言えば、能よりも素謡向きの曲である。筆者は、極力、曲の好き嫌いを失くすように心がけてきたが、率直に言えば、好きな曲のベストテンに入る。

総じて、物静かに格調高く謡って欲しい。

シテ二丁裏の冒頭の呼びかけから難しい。言葉だからと言ってあなどることなく、シテにあたったなら、先ず最初の一句を繰り返して練習していただきたい。

続くカカル謡も平凡のようであるに非ず。力まないで、しかし生み字を生かすことで確りした謡いになる。ついでに言わせて頂くと、強い謡い、確りした謡いは、声量とは関係なく、生み字の活かし方如何で決まる。

六丁裏四行のシテ謡は、軽くならないよう、ひそやかに、たっぷりと。後シテは、ほとんど三番目ものの気持ちで、しつとりと謡い出して欲しい。十丁表、クセ舞の後の一くさりも、決して慌てず、じつくりと謡うべし。なお、「・・やいうの曲」の「う」はきちんと中音まで落として欲しい。

ワキⅡ固有名詞を持ち、しかも、白大口袴という正装だから、重いのは当然。素謡の場合でも大事なお役です。最初から一枚半にわたる長丁場だが、焦らず、駆け出さず、落ち着いて謡って欲しい。五丁裏表の長い詞も大切な箇所、確りと。地謡Ⅱ曲趣を損ねないように、全編、落ち着いて謡うこと。クセは、その部分自体が名曲と言つてよく、クセの中に序破急も強弱（謳いあげたり、しんみりしたり）があることを意識してください。

技巧的には、前クセの、所謂「遍照張り」と言われている箇所が要注意。思い切つて、しかも綺麗に高いところに持ち上げること。

キリのノリ地は、とかくこれで最後だと言わんばかりに駆け出しがちだが、ここも、幾分引き立てては謡うものの、テンポは抑制に努めて欲しい。

二人静

雲林院と同様の序之舞ものであるが、こちらはよりドラマティックで、情緒を前面に出しているし、謡曲的にはなんとと言っても、シテ、ツレの、主客転倒も含めての面白さが売りである。

シテⅡツレとの連吟の部分が多いが、独吟の部分では、十分に貫禄を出して欲しい。

三丁裏の、呼掛にしても、後シテの一くさりにしても、短いからと言って侮らず、やや低めにとつて、じつくりと謡うべし。

ツレとの連吟では、ツレに遠慮することなく、シテのペースで運び、ツレがシテに全て追随するのが常道。

ツレⅡ二丁裏の一セイからサシ、上歌と続く謡は、あくまでもツレの格で謡うのだから、やや高めにとつて、スラリめに。

シテに変身するのは、四丁裏の「なに、真しからずや」からで、このところの格調の変え方に技巧が要る。調子は低めになるが、あくまで品良く、化け物のような凄みが出ないよう心がけられたい。

連吟では、シテの補佐役として、シテ以上に気を使うのが役目。シテが謡いを間違えたら、ツレもそれに付き合うくらいの気働きを。また、息継ぎはシテと同時にしない（間を空けない）のが原則である。

ワキⅡ謡での技巧、長丁場はあまりないが、役割としては大事。強く、確り目に。

地謡Ⅱ聞かせどころは、クセ（二段グセ）から序之舞にかけての部分につくる。前グセは静かに、中間は綺麗に謳い上げ、後グセは運び目にして、強弱の変化をつけるようにし、「そのみならず・・からは、若干低めに落とし、運んで謡う。」